

知覚の倫理

正しい現実認識が人を幸福にする

高橋徹（倫理研究所専門研究員）

主観的に観察された現象界の中では、我々は現象の中に、
一つないしは二つの力の現われしか見ないのだ。
あらゆる動きの中に三つの力の現われを見ることができれば、
我々は世界をありのままに（事物それ自体を）見るようになる。（グルジェフ）

はじめに 「知覚」の観点から純粹倫理を見直す

倫理研究所の創立者である丸山敏雄（1892～1951、以下「敏雄」と略す）は、終戦後まもなく「徳福一致の倫理」を唱え、それを純粹倫理あるいは新しい倫理と呼んだ。「徳福一致」とは、道徳と幸福が一致すること、誰でも正しい道徳的な行ないをすれば、幸福になるということである。敏雄は、これを 守れば必ず幸福になり、はずれば必ず不幸になる絶対倫理 とも呼んでいる。また、同様に敏雄は、この 道徳と幸福とが、きっちり一つになるところの もの（その一体性）を、カントなどの哲学者の思索を踏まえて「最高善」とも呼んでいるが、最高善は単なる理想だったり、「あの世（来世）」に求めたりするものではなく、「この世（現世）」にこそ求めて（見出して）実際に行なうものとしている。

だから、もし人が何らかの道徳に従って行為しても幸せにならないとしたら（本人のやり方が正しくない場合もあるが）その道徳はまちがっていることになる。つまり、もし道徳と、それに基づく行為がその人を幸福にしないのであれば、その道徳はまちがっているばかりか、むしろ有害で不要ということになる。「徳福一致」に基づけば、それは守るべき道徳ではないということになるのだ。

このように「徳福一致」という新しい倫理道徳のあり方を示した敏雄は、それを「ふるい（篩）」にして、旧道徳（「徳福一致の倫理」が現れる前の旧来の道徳）の確かさを検証した。たとえば、敏雄の代表作で隠れたベストセラーである『万人幸福の栞』（新世書房）という著作も、旧道徳を否定するのではなく、「徳福一致」というふるいにかけて、旧道徳の活かすべきところは活かし、敏雄の見出した新しい倫理と調和的に融合させた内容となっている。古い道徳でも、この「徳福一致」という観点から見ると、そのまま活かせるものもあるし、またそうでないものもあることが明らかになってきたのである。

先に「ふるい」と書いたが、「徳福一致」の原則は、純粹倫理あるいは最高善を見出すうえで、一種の指標ないし選択基準として機能している。特定の道徳が、それを守ることによって真に幸福になるのか、ならないのかによって、その有効性が実証され、取舍選択される。未来に伝えていくべきものか、それとも破棄すべきものなのかが決まる。

もっとも、ここで「幸福とは何か」という問いを発する人もいるかもしれない。幸福の定義はさまざまで、これと断言するのはむずかしいが、ここでは一般的に「心が満ち足りていること」としてもよいし、あるいはもう少し高度に「人の生活を万人の希求する自由へと導く心の状態」としてもよい。本稿では幸福の定義よりも、知覚と現実認識の問題をとりあげたい。すなわち、正しい行ないが満ち足りた生活と結びつくという徳福一致の原則を知るには、まず現実認識における「知覚」と「錯覚」を区別する必要がある。そして現実認識を正しくすることが幸福な生活を導く という筆者の仮説を論証する方向で筆を進めてみたい。